しろつめぐさ
白詰草
（クローバー）

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 **No.390**

2023（令和5）年4月10日（月）発行

○人類や社会、国民のために貢献されてきた著名な方々が、また高齢になって次々幼なじみや友人が亡くなっていき、残念だ、寂しいなと感じます。○でも一方で、将来が期待される有望な赤ちゃんが生まれたり、若者の世界的な活躍ぶりも“希望”で“喜び”ですね。

追悼 大江健三郎さん、坂本龍一さん ありがとうございました

ノーベル賞作家の大江健三郎さんが3月3日、老衰で88歳で死去。生涯、行動する知識人として憲法、原発、反核に関わり続け、04年結成の「九条の会」呼びかけ人のひとりでした。

また、世界的な音楽家の坂本龍一さんも3月28日、ガンのため71歳で死去。音楽だけでなく、世界に非戦や脱原発を訴え、東日本大震災の被災民を支援し、最近は東京の明治神宮外苑の再開発反対などの環境問題にも積極的でした。

そこでお二人が折に触れ遺された“ことば”を抜き書きしてみました。

▲1969年長男の光ひかりさんを自転車に乗せて走る。光さんは知的障害がありましたが、作曲家としてご活躍。

大江健三郎さんのことば

「僕の原点は、どうしても戦後民主主義です」「よく見なければ、何も見ないと同じだ」「僕には希望を持ったり、絶望している暇がない」

「憲法9条こそが日本の安全保障である」

「（2012年11月憲法公布66周年のつどいで）形のない物、希望をどう表すか。小説『星の王子様』の「肝心なことは目に見えない」、魯迅の「歩く人が多ければそれが道になる」。憲法を守り平和な社会を築いていこう」

「（2014年集団的自衛権行使容認に反対の記者会見で） 政府の決定は、日本の平和憲法をひっくりかえした。私は憲法が定める平和主義と民主主義を一番大切に思っているが、安倍首相は戦後日本を悪い時代と考え、憲法を大切なものと考えていない」

「憲法9条を守ること、平和を願うことを生き方の根本に置いている。われわれは戦後70年近く、ずっとそうしてきた。次の世代につなぎたい」

坂本龍一さんのことば

「（2001年ニューヨークの同時テロで）戦争を止められるかもと本気で思ったが、ものを言うのは勇気とエネルギーが要る。でもやり続けなけりゃ」

「（12年原発反対デモ、首相官邸前で）原発反対です。再稼働反対です」

「（20年辺野古の新基地建設反対のため沖縄で） この美しい自然を壊してまで新基地を造る意義はない」

「（20年10月核兵器禁止条約が発効して）唯一の被爆国である日本政府の批准拒否には情けなさと憤りを感じます」「核と人類は共存できない」

「世界の国の指導者、あるいは上に立つ人は広島、長崎に行ってほしいですね」

「原発事故と東日本大震災被災地の問題、それ以降の日本の政治状況、社会状況はますます悪くなっている」「声を上げないとしたらそれがストレス。見て見ぬふりをするというのは僕には出来ないことですから」

「曲を作ろうと意気込んだところで、だいたい良い曲は出てこないんです。寝ていて急に浮かんだりする。それをしっかりキャッチできるか」

（和田誠さんのイラストより）

No.390

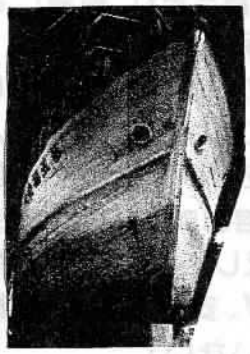
東京都立 第五福龍丸展示館へどうぞ

コロナ禍も下火になって ダークツーリズムですが

1954年3月1日、アメリカがマーシャル諸島のビキニ環礁で行った水爆実験で、「死の灰」をあびた静岡県焼津港所属の「第五福竜丸」（マグロ漁船、長さ30m、重さ140トン）。乗組員23人が被曝して、久保山愛吉さんが死去しました。これは広島、長崎に次ぐ第三の被爆事件として全世界に衝撃を与えました。

DAIGO FUKURYU MARU EXHIBITION HALL
都立 第五福竜丸展示館

◆都江東区夢の島2－1－1
◆入管無料・月曜日休館
（祝日は開館し火曜日休み）
◆開館時間9：30～16：00



<主な展示物>
- ○第五福竜丸船体・エンジン・大漁旗
- ○第五福竜丸乗組員の被曝の状況
- ○原水爆の歴史・資料・被害
- ○焼津入港の日の、日めくりカレンダー
- ○当時の「死の灰」（ビン詰め）
- ○当時使われたガイガー計数管
- ○亡くなった久保山愛吉さん記念碑
- ○日米政府による事件の決着

この事件は『読売新聞』が3月16日朝刊でスクープし、世界中に拡大します。

当時『朝日新聞』島田市通信局の記者だった清野粛郎さん（原町支局長）は、そのすっぱ抜かれた苦い取材の様子を、1982年に私（事務局山崎）に話してくれました。その聞き取りを被爆体験談集『私も証言する』に掲載し出版しましたが、今回一つの資料としてこの展示館に寄贈されました。　※清野さんは取材の死の灰などで被曝したためか、2年後の1984年にガンで死去されました。

第5回WBCで日本・侍ジャパンは3月22日優勝に輝き、特にMVPの大谷翔平選手の活躍ぶりが注目されています。そこで大谷選手と私たちの周りとの関わりをさがしたところ、次のような文章を見つけました。

原町区の詩人若松丈太郎さん（2021年4月21日ご逝去・本会会員）は、大谷翔平さんと同じ岩手県奥州市（旧水沢市）生まれで、現在の活躍を予感していたのか、5年前の2018年に次のようなエッセイを書かれています。

大谷翔平は異星人か？

詩人 **若松丈太郎さん**（本会会員）

<「みちのく春秋」2018年7月夏号29号・コールサック社『若松丈太郎著作集』第三巻より>

「（略）メジャーリーグのエンゼルスに入団した大谷翔平選手は、承知のように、開幕第一週の週間MVPを獲得し、開幕から二か月ほどの成績は、投げては4勝、打っては6本塁打、打点20，そして打率も3割前後と、ファンや関係者の度肝を抜く活躍ぶりで、かのベーブ・ルースとも比較された。

そんな大谷選手への高い評価のなか、「大谷翔平は異星人だ」と言った人がいたと私は記憶しているのだ。（略）でも、4月の新聞を読み返してはみたものの、そんな記事は見つからなかった。テレビニュースで聞いたのだったろうか。

大谷翔平の故郷は、奥州市水沢区姉体あねたい町だという。姉体は、北上川中流域の右岸に位置している。姉体のすぐ北には「跡呂井あとろい」という地名があり、（略）これらの地名によって、わたしは大墓公阿弖流為たものきみあてるいの名を連想して、エミシの族長の根拠地」はおそらくこのあたりだったのだろうと想像したものである。

相馬地方に大隕石が落下したと同時に、「跡呂井あとろい」あたりにも宇宙人が飛来して生きながらえ、エミシと呼ばれる子孫を伝えたのではないか。（略）大谷翔平とアテルイとがそっくりだったらどうだろう。なかなかではないか。（略）」

このお話は、小高区に由緒ある作家埴谷雄高が、「昔、相馬地方に巨大で奇妙な内的燃焼を持続する隕石が落下し、「執着心の強い極端の粘り族」の宇宙人、埴谷雄高と荒正人、島尾敏雄の三人が生まれた」と述べています。若松さんはこのことを大谷翔平に重ねて同郷人の誇りとして思い出したというエッセイです。

そして、WBCでの大谷選手や佐々木朗希選手の活躍、昨夏甲子園の仙台育英高校の全国制覇などで、東北地方の見直しや再評価が進むことが期待されます。